

バーバーショップ・スタイルは
何を大切にしているか

～エンターテインメントと合唱の融合～

関西学院高等部 3年B組 桑本 貴之

目 次

はじめに	3
第一章 バーバーショップ・スタイルとは	4
第二章 バーバーショップの発展過程	7
第一節 様々な協会	7
第二節 国際大会	10
第三節 カルテット歴代チャンピオン	13
第三章 日本でのバーバーショップ	17
第一節 日本バーバーショップ・カルテット協会の設立	17
第二節 バーバーショップを歌う合唱団	18
第四章 バーバーショップを歌おう	21
第一節 パートを決めよう	21
第二節 楽譜を手に入れよう	22
第三節 バーバーショップ入門キット	23
第四節 タグ	23
第五節 Vowel Matching (母音を揃える)	24
第六節 二重母音・子音の処理	25
第七節 MC	25
第八節 コレオグラフィー (振り付け)	26
第五章 バーバーショップ・スタイルは何を大切にしているか	28
第一節 感情表現	28
第二節 エンターテインメント性	29
結論	31
あとがき	33
注釈	35

はじめに

バーバーショップ・スタイルとは、合唱のスタイルの一つである。僕はバーバーショップ・スタイルが大好きだ。舞台の上で、お客さんを楽しませ、自分達も楽しそうに歌う演奏に、一瞬で引き込まれた。

本研究テーマ「バーバーショップ・スタイルは何を大切にしているか」を執筆しようとしたきっかけは二つあり、一つはそんなバーバーショップの魅力に迫り、失ってはならない精神とは何かを明らかにしたいと思ったからである。二つ目は、ネットなどを見たとき、バーバーショップについて網羅的に記している文章があまりにも少ないので、誰かがまとめないといけないという思いがあったからである。

研究の方法として、本だけでなく、演奏会のチラシ、パンフレット、各種HPも中心に据えて研究していく。そして、フィールドワークとしてお話を伺いに行ったり、未発表の手記を頂いたりしたものも参考にしていく。

さて、論文の構成であるが、第一章でバーバーショップの定義づけを行い、第二章でバーバーショップの発展過程を確認する。第三章で日本でのバーバーショップの隆盛を見ていき、第四章では実際にバーバーショップを歌おうとしたときの注意、流れをチェックする。そして第五章で、本論文のテーマである「バーバーショップ・スタイルは何を大切にしているか」を明らかにしていく。第六章で結論を述べる。本論文はこのような構成になっている。

第一章 バーバーショップ・スタイルとは

まずは「バーバーショップ・スタイルとは何か」という所から本論を始める。まず、バーバーショップ・スタイルの定義を確認しよう。

米国バーバーショップ・カルテット保存振興協会 Society for the Preservation and Encouragement of Barbershop Quartet Singing in America (略して SPEBSQSA) 改めバーバーショップ・ハーモニー協会 Barbershop Harmony Society ではバーバーショップ・スタイルを次のように定義している。

バーバーショップ・スタイルとは合唱の一つの形式であり、無伴奏の四部合唱である。基本的には上から二番目のパートであるリードがメロディを歌い、テナーがその上の和声部、ベースがその下の和声部を歌い、バリトンが他の3パートの入る和音を完成させるためメロディの上または下の音を歌う。特徴的なことは、五度圏の和音展開を持つメロディを中心に、セブンス（七度）の和音が多いこととスワイプ **Swipe** を多用することである¹。

また次のようにも説明される。

バーバーショップ・スタイルとは、

1. アカペラ（無伴奏）で歌われ、
2. 四つのパート（テナー、リード、バリトン、バス）で構成されていて、
3. 高い方から二番目のパートであるリードがメロディを歌い、
4. 七度の和音から主和音への解決に快感を見出し、
5. テンポを自在に揺らすことで溢れる感情を表し、
6. 完璧なハーモニーから生まれる倍音を追い求め、
7. 和音の移り変わり（スワイプ）を愉しむ、

コーラスのスタイルのことを指す²。

まとめると以下のようなになる。

1. 4つのパートで構成されるアカペラコーラス
2. 高い方から2番目のリードと呼ばれるパートがメロディーを受け持つクロスハーモニー
3. 七度の和音を多用し、溢れる感情を和音の変化に込め、特にバラード系の曲ではテンポルパートが頻繁に行われる³。

ちなみにバーバーショップとは形式ではなくスタイルであるので、編曲次第でどんな曲でもバーバーショップ・スタイルになり得る。

いくつかのキーワードが出てきたので説明する。

セブンス…バーバーショップを語る上で欠かせない和音で、つまりドミソシbのこと。緊張感があり、解決に向かうはずのセブンスだが、本場アメリカのカルテットの国際大会では演奏時間中の30%以上セブンスが鳴っていないと失格になるというルールがあったほどバーバーショッパーに愛されている和音である。

スワイプ…一つの単語や音節の中で、二つ以上の和音進行を行って変化をつけ、感情表現や伴奏効果を持たせること。例えばフレーズの終わりで和音を変化させハーモニーをしっかりと楽しむなど、バーバーショップらしい編曲手法のひとつ。

テンポルバート…自由なテンポで、という意味。曲のテンポにとらわれず、自由な感情表現を行うことができる。ここぞという所でルバートをかけるのが粋。

さて、バーバーショップ・スタイルには4つのパートがあり、それぞれのパートの特徴は以下の通りである。

テナー：Tenor…メロディより上のハーモニーを歌う最高音部のパート。ハーモニーを多彩に色づけ、和音を響かせるのが役割。いわばバーバーショップ・ハーモニーの秘密兵器。デリケートな感性と美しい高音、飛び出さない強い自制心が必要。他の3パートの手綱を握り、ひっそりとハーモニーのピラミッドの頂点を極めるのが喜び。

リード：Lead…通常の男声合唱ではトップがメロディ・パートだが、バーバーショップでは上から2番目のこのパートがメロディを歌う。音楽をリードする役割なので「リード」と呼ばれる。力強さ、柔らかさ、表現力が要求される。

バリトン：Bariton…通常の男声四部合唱のバリトンと同様な役割で、和音の出来を左右する音楽的に重要なパート。音域は、リードより少し下に広がる。テナーと同様、飛び出さない自制心が必要。又、和音の芯の音をつなぐ「要」の役割柄、メロディックではない難解な音の連続で、玄人好みのパートと言える。

ベース：Bass…全ての女性の心を痺れさせる（パート紹介の時にこういった枕詞がよく使われる）最も低い音域を担当し、バーバーショップ・ハーモニーの基礎作りを行う。和音の基音や5度に入ることが多いので、たっぷり歌うことも必要。通奏低音の役割だけでなく、リードに変わりメロディを歌うことも多いので、低音の響きに加え歌心も求められる⁴。

これらのパートによりバーバーショップは構成されている。

第二章 バーバーショップの発展過程

この章では、バーバーショップがどのようにして生まれ、発展してきたのかを探る。

ブリタニカ百科事典で「Barbershop Quartet」と調べてみると、「米国で行われている、ポピュラーなメロディに即興的にハーモニーをつける、形式ばらない合唱の形。」と出てくる。バーバーショップとは米国、アメリカで生まれたものであることが分かる。

次に名前の由来である。何故、合唱とあまり関係なさそうな「バーバーショップ（床屋さん）」という名前がついたのだろうか。

床屋のスペースは人が集まって音楽の演奏をする一種の社交場であり、床屋で待っている間に客同士が楽器を弾いたり、歌を歌っていた。欧米の昔の床屋は、町の技術・芸術の拠点であったのだ⁵。

なるほど、近代的な専門理髪店を想像してしまうから、「床屋」と「音楽」が結びつきにくいわけである。当時の床屋とは、音楽的な溜まり場となっていたのだ。

床屋で生まれたバーバーショップがそのスタイルを確立するのに欠かせなかった要素、それはアフリカ系アメリカ音楽である。

当時の黒人音楽家達がバーバーショップ・スタイルに多大な影響を与えた顕著な証拠として、①パート間の掛け合い、②リズムの作り方、③和音展開を挙げ、いずれもヨーロッパの古典音楽にはみられない音楽作法であることを示して、アフリカ系アメリカ人がスタイルの確立に大きく寄与したことは、音楽面からも疑う余地はない⁶。

和音を強烈に響かせることや、スワイプなどにみられるハーモニー展開は、黒人カルテットの影響が非常に大きい、ということである。

ちなみに、1900年代初頭には黒人社会から白人社会にまで広がりを見せたバーバーショップ・ハーモニーは、その後、流行遅れとなり衰退する。米国バーバーショップ・カルテット保存振興協会（SPEBSQSA）が1938年から再興活動を始めるも、黒人はその活動から締め出されてしまう。1963年の公民権法成立まで、再興は白人社会の中に留まっていたのだ。

第1節 様々な協会

次に、世界のバーバーショップ活動の中心である様々な協会について紹介しよう。

やはり、米国バーバーショップ・カルテット保存振興協会 SPEBSQSA (Society for t

he Preservation and Encouragement of Barbershop Quartet Singing in America) を抜きに語ることは出来ない。この協会の起こりは、バーバーショップの再興が目的であった。

衰退期にあったバーバーショップ・スタイルの合唱音楽の勢いを取り戻そうと、1938年にキャッシュ O.C.Cash とホール Rupert Hall を中心として、復興活動のために米国バーバーショップ・カルテット保存振興協会 SPEBSQSA が設立された。以来60余年で、北米（米国、カナダ）を主に、世界中に約34,000人の会員を有するほどになった、米国で唯一の男声バーバーショップ・ハーモニー愛好者の団体である。1800以上のカルテットが登録されている⁷。

現在のSPEBSQSAの活動は、どこまで幅が広がっているだろうか。

協会の活動の目的は、その名の示す通り、バーバーショップ「カルテット」の「保存」と「振興」という三本柱であり、その普及とレベルアップである。このために主催する主な行事としては、アメリカの独立記念日（7月4日）の週に開催される国際大会 International Convention、1~2月に開催される冬季大会 Midwinter Convention 等がある。日常活動としては、各地区・支部を通じての会員増強と、レベルアップのためのプログラム策定・実施である。また、協会に登録されたバーバーショップ・スタイルの編曲の楽譜や、コンテストのCD・ビデオ等の製作・販売を行うハーモニー・マーケットプレイス Harmony Marketplace の運営、隔月刊の協会誌ハーモナイザー Harmonizer の発行の他、音楽的指導や審査員の養成、コンテスト審査規制の見直し・改訂なども行っている⁸。

ちなみに、“Society for the Preservation and Encouragement of Barbershop Quartet Singing in America” という名称はあまりにも長く、親しみも持てないということで、現在は、**バーバーショップ・ハーモニー協会 BHS (Barbershop Harmony Society)** という名前に変更されている。

ところで、BHSの中には様々な内部団体がある。その一つに、ウッドシェディングを専門とする協会がある。その名を、**AHSOW (Ancient Harmonious Society Of Woodshedders, Inc.)** という。“Woodshed”とは英語で「薪小屋」だが、バーバーショップの世界では、楽譜に頼らない合唱のことを指すことが分かる。

バーバーショップ・ハーモニー協会には、昔ながらのウッドシェディングを楽しむAHSOW (Ancient Harmonious Society Of Woodshedders, Inc.) という内部団体がある。その団体の定義では、「ウッドシェディング」とは「楽譜によらず、リードが皆の知っているメロディを歌い、テナー、バリトン、ベースが、既成の編曲によらず自分の和音感覚だけを頼りにハーモニーを付けることをいう」とある。即ち「練習」ではなく、「即興的に＜和音＞を鳴らすこと」そのものが目的である。また、ウッドシェディングをする時の心得として、現在では「決して人前で披露

してはならない」とされ、また「自分のパートをウロ覚えのまま演奏するのをウッドシェディングとはいわない」とも釘をさされている。

AHSOWの活動は、協会の発足当時の、楽譜がない時代のバーバーショップの醍醐味を残そうとするものである。それはメロディさえあれば、自分の和音感覚だけを頼りにハーモニーをつける「達人たち」の団体であり、オーディションを通らなければ入会できない。中々の関門のようで、協会のトップ・クラスのカルテットのメンバーでも、AHSOWの入会のオーディションでは四苦八苦している⁹。

楽譜なんて要らない、というのがウッドシェディングであるが、BHSの掲げる「保存」と「振興」とは並立が難しく、常に悩みの種であったようだ。

例えば、バーバーショップ・ハーモニー協会の発足からしばらくして、楽譜を出版しようとしたとき、「バーバーショップの本筋はウッドシェディングだ」という<スタイル保存派>と、「それでは底辺拡大ができない」という<普及振興派>の間で、出版の是非が大議論になったそうだ¹⁰。

楽譜もなく瞬時にハモってしまう人たちの団体、AHSOWは確実に世界のバーバーショップ活動を牽引する団体の一つだろう。

その他のBHSの内部団体として、**国際チャンピオン協会 AIC (The Association of International Champions)**がある。後述するが、国際大会のカルテット部門というものがあり、そこでチャンピオンになったカルテットの全てに、AICに加盟する資格が与えられる。1938年のBHS創立の翌年からカルテットチャンピオンを選出しているので、2014年末現在で資格を持っているグループは計76カルテットほどある。しかし、メンバーが亡くなったり、高齢化して活動していないカルテットもたくさんあるので、正しくいくつとは言いがたい。AICの活動は、主にAICショーの主催などを行っている。

さて、BHSは男声の団体であるが、女声・混声の協会もちろん存在する。女声の協会は**スウィート・アデラインズ・インターナショナル SAI (Sweet Adelines International)**と**ハーモニー・インク HI (Harmony, Inc.)**の2協会が存在し、混声の協会は、**混声バーバーショップ・カルテット協会 MHBQA (Mixed Harmony Barbershop Quartet Association)**という協会である。どの協会も、各パートをテナー、リード、バリトン、ベースと呼んでおり、女声ならではの声部というものはない。

女声の難点は良いベースを得ることのようで、ベースの良し悪しがコンテストの順位を決めているように感じられるほどである。ちなみに、女声の音域に合わせるため、女声用の編曲は男声用の譜面より3~5度低く作られている。

混声では、テナーとバリトンを女声、リードとベースを男声が担当する。4声部を適材適所で集められるので、女声より混声の方がバランス良く感じられる¹¹。

ただ、混声バーバーショップ・カルテット協会ではコーラスの活動を支援しておらず、カルテットと大規模カルテット（指揮者がつかないコーラスを大規模カルテットと呼ぶ）だけに限っているようだ。

一度は廃れたバーバーショップだが、数多くの協会に支えられ、再興そして今日の盛り上がりを見せていることが伺える。

第2節 国際大会

ここまでいくつかの協会を紹介しながらバーバーショップの発展過程を確認してきた。続いて、バーバーショップのコンテストも紹介していこう。

最も大規模な大会として、**国際大会 International Convention** は欠かせない。アメリカの独立記念日、7/4が含まれている週に開催され、一つの都市が丸々バーバーショップに包まれる。カルテットとコーラス、そして学生カルテットの世界一が決まる、全てのバーバーショップパーが注目する一週間である。コンテスト以外にも、ショーなど様々なイベントが至る所で開かれており、バーバーショップそのものを純粋に楽しむことができる。

そこで、国際大会に参加するなら絶対にハズせない、これは必見というイベントを紹介していこう。

カルテットコンテスト

その年のチャンピオンカルテットを決める、最も注目されるイベントの一つ。三日間にわたって行われる。40組以上のカルテットが出場し、水曜日の **Quarter Final**（準々決勝）で20組に、木曜日の **Semi Final**（準決勝）でさらに10組に絞り込まれ、1日おいた土曜日の夜に **Final**（決勝）へと臨む。準々決勝、準決勝、決勝でそれぞれ2曲ずつ別の曲を歌い、トップ10の順位は計6曲の累積得点で争われる。決勝まで進めなかったカルテットの順位と得点は翌朝には発表されるが、勝ち残ったカルテットは次の出演順（抽選）のみ公表され、累積得点はブラック・ボックスとなる。その時点での順位が分からないので、聴衆の方も岡目八目で予想に熱中することができる。

コンテストに出場するカルテットにとって、その年の春の地区コンテストが国際大会予選となる。協会の登録カルテット約1,800のうち国際大会へ出場できるのは40数カルテット、全体のたった2%強である。狭き門を通らなければコンテストにさえ出られない。

コンテスト本戦ではゴールド・メダルが1組、シルバー・メダルが1組、ブロンズ・メダルが3組選ばれる。しかし、一度シルバー・メダルを獲得したからといって翌年はゴールド・メダルという保証はない。5位から10位あたりに何年も位置していながら、そのまま消えていったカルテットがたくさんある。一方で、国際大会に出て数年でチャンピオ

ンになったり、初参加のカルテットがチャンピオンになったりすることもある非情な世界である。

カルテットコンテストでは、一度優勝するとそのカルテットでの大会出場資格が失われる。つまりチャンピオンは永遠にチャンピオン、王座から引きずり降ろされることはないのである。翌年からそのカルテットはコンテストに出られない代わりに、国際大会の他のイベントに出演し盛り上げる義務を負う。ちなみに、一度優勝し出場資格を失ったカルテットでも、2人以上のメンバーを入れ替えれば別カルテットとして参加できる。このやり方で2個目3個目のゴールド・メダルを獲得した者も現れた。

なお国際大会に行くと、かつてのメダリスト達が誇らしげにメダルを胸に下げて歩いている。もちろんメダリスト達自身の誇りの表れなのだが、国際チャンピオン協会（AIC）の典礼委員会が、メダリスト達に公式の場ではメダルを着用することを義務づけているためでもある。バーバーショップの世界では、彼らは勇者か英雄のごとくで、あまたのバーバーショップから仰ぎ見られる存在なのである。

コーラスコンテスト

コーラスコンテストが始動した当初はカルテットコンテストの添え物のような扱いだだったが、ごくわずかの恵まれた才能の持ち主ばかり集まるカルテットコンテストと違い、コーラスコンテストは大勢の歌手が参加できるので、協会の予想を遥かに超えて発展してきた歴史がある。

カルテットコンテストは三日間に分けて行われるのに対して、コーラスコンテストは20余のコーラスが参加し、一発勝負でチャンピオンが決まる。優勝するとその後2年間のコーラスコンテスト出場資格を失い、3年目から再出場が認められる。よって、ある3グループがコンテストで互いに競い合うことなく、三年ごとに優勝する事態も起こりえるのである。

実際に、1990年代はヴォーカル・マジョリティ Vocal Majority、マスターズ・オブ・ハーモニー Masters of Harmony、アレキサンドリア・ハーモナイザー Alexandria Harmonizers という御三家が優勝を独占していた。しかし2001年に御三家の一角、アレキサンドリア・ハーモナイザーがニュー・トラディション New Tradition Chorusによって崩されると、アンバサダーズ・オブ・ハーモニー Ambassadors of Harmony やウェストミンスター・コーラス Westminster Chorus、トロント・ノーザン・ライツ Toronto Northern Lights などが続々チャンピオンに。そんな中、未だに破られず、最多優勝回数と連続優勝の記録を更新中なのがヴォーカル・マジョリティ。さらに、優勝こそしていないものの、ゼロ・エイト Zero 8 というスウェーデン出身の若手コーラスも勢いがあり、これからの動きに目が離せない。

AICショー

国際チャンピオン協会（AIC）が主催する、歴代のチャンピオンカルテットだけを集めた夢のようなショー。互いに張り合っているのか、持っている個性を最大限に生かした演奏をするので聴衆も大喜び。また、各カルテットの単独ステージだけではなく、その幕開けとフィナーレには「AICコーラス」と銘打っての合同コーラスも行われる。あまり活動していなかったりメンバーが欠けたりしているカルテットも参加する、同窓会的なコーラスである。少ない練習でもそこはチャンピオン、素晴らしいハーモニーを聴かせてくれる。

AICショーは今や国際大会の超人気イベントになっていて、事前にチケットを購入しておかないと当日入手するのはほとんど不可能であるほどである。

World Harmony Jamboree

世界のコーラスとカルテットを集めた祭典、ワールド・ハーモニー・ジャンボリー（WHJ）は1990年代から協会の公式行事となり、今日では国際大会の目玉行事の一つとなっている。協会誌 *Harmonizer* によれば、当初は頭数も揃わず、ショーの形式を整えるのが大変だったようだが、最近は海外の支協会の優勝グループと、国際大会の前年度優勝のコーラスとカルテットも出場する由緒あるショーに変貌を遂げている。

WHJの最近の充実振りは、国際大会の行事の中でも一番面白いという人もいるほど。名うての連中が、それぞれのお国柄も生かしたバラエティーに富む選曲で会場と一体になって楽しむ雰囲気は、緊張したコンテストの続く大会日程の中で、AICショーと並んで「楽しめる」催しとしての価値が認められている。

特筆すべきは、2000年のカンザス・シティ大会でのWHJに、初の極東からのグループとして後述の東京バーバースが招待され、ジャンボリー会場を埋めた2,500人の聴衆に歌を披露したことである。結果、東京バーバースの熱演に会場は総立ち、“Show Stealers”（ショーをかつさらった奴ら）との異名を取るほどの大好評であった。

Sing With The Champs

AIC主催のイベントで、25ドル(2500円ほど)を協会に寄付すると、歴代のチャンピオンカルテットと一緒に歌え、さらにそのビデオと写真が貰えるというもの。事前に希望のカルテット、曲目、パートを申し込みし、残り3パートのカルテットメンバーと共に歌う。参加者の中には本家と比べても何ら遜色ない演奏をする人もおり、それを楽しみに観に来る人もいるほどである。

他にも、前年度優勝カルテットによるセミナーが受けられるマスタークラスや、15~25

才の若者が参加できる、カルテットコンテストと全く同じ基準で採点される学生カルテットコンテストなどもある。このような国際大会の存在が、次世代を担う若手バーバーショップの育成や、これからのバーバーショップのさらなる発展にも大きな役割を果たしていることは間違いない。

第3節 カルテット歴代チャンピオン

さてここからは、前述したカルテットコンテストの歴代チャンピオンを紹介していこう。1936年よりチャンピカルテットは輩出されているが、数が多いので、日本に招聘されたことのあるチャンピカルテットと、2006年以降のチャンピカルテットを特筆していく。

1990年優勝 アコースティクス ACOUSTIX

前述の、国際大会初参加でチャンピオンになったカルテットとは彼らのことである。結成6ヶ月でいきなり優勝してしまった。バーバーショップのビデオ“Voices”に出演していたことから日本でも名が知れるようになり、バーバーショップを始めようとしていた多くの日本人に影響を与えた。チャンピオンになってからベースのメンバーが交代しているが、声も背格好もそっくりという人選がなされた。メンバー交代前のベースが後にマックス・キュー Max Q として優勝するジェフ・オクスリーである。二度来日しており、2000年に東京、所沢、伊丹、岡山で、2003年には東京、金沢、福岡、京都の4都市でショーを開催した。

1992年優勝 キープセイク Keepsake

テナーのロジャー・ロスは、東京ディズニーランドのグランドオープンにエンターテイナーとして参加していたなど、日本とのゆかりがある人物。後述する、東京バーバーズというコーラスの指揮者グループの一人を務めており、また、バリトンのトニー・デローザと共に新たにメイン・ストリート Main Street というカルテットを結成し再び国際大会に挑んでいる。

2009年に来日し、東京バーバーズのショーにゲスト出演したほか、関西では単独のショーを開催した。

1993年優勝 ガス・ハウス・ギャング The Gas House Gang

ベースのジム・ヘンリーはAmbassadors of Harmonyの常任指揮者をしている他、クロスローズ Crossroads というカルテットでも再び優勝している。

彼らは4人ともアメリカ人としては背が低いので、イジリの格好的にされる。他のカルテットやコーラスで「背の低いネタ」があったら大抵彼らのことである。

2003年にバリトンのロブ・ヘンリーが亡くなってしまったが、後にCrossroadsで活躍するブランドン・ガイトンをバリトンに迎え、2005年に来日した。東京と伊丹でショー・セミナーを開催、西宮では日本バーバーショップ・カルテット協会（後述する）が主催する第2回バーバーショップ・カルテット・フェスティバルにもゲスト出演した。彼らはその日本ツアー、特に伊丹でのショーを最後に活動を休止している。

1995年優勝 マーキー Marquis

結成後わずか1年でチャンピオンになったカルテット。

阪神大震災の翌年、1996年に行われた震災メモリアル・コンサートの際に、兵庫県合唱連盟から招聘された。素晴らしいハーモニーを聴かせたが、その1年後、リードのランディが医療ミスのため亡くなってしまう。その数年後に解散した。

1996年優勝 ナイトライフ NightLife

テナーのロブ・メナカーは2013年にマスターピース Masterpieceとして再び優勝している。

東京バーバースのゲストカルテットとして2005年に来日を果たした。

2006年優勝 ヴォーカル・スペクトラム Vocal Spectrum

2004年にカレッジ部門チャンピオンになった後、翌年に一般部門に出場し6位、その翌年にチャンピオンになるという快挙を成し遂げた。カレッジ部門のチャンピオンが一般部門のチャンピオンになったのは、2002年優勝のフォー・ヴォイセズ Four Voices以来2組目。

リードのエリック・ダルビーが歌うメロディの美しさと、テナーのティム・ウォリックが持つ高音の力強さとハンガー（ロングトーンで音を伸ばし続けること）は一聴の価値あり。CDを3枚リリースしており、特に“VSⅢ”は2011年のBest Barbershop Albumに選ばれている。

ちなみにティムの職業は“Learning Track Maker”といい、音取り用の音源を全パート収録し販売することで収入を得るといふ珍しい仕事をしている。

2008年に来日し、仙台、東京、横浜、伊丹でショーやセミナーを開催、西宮ではバーバーストップ・フェスティバルにゲスト出演した。

2007年優勝 マックス・キュー Max Q

2004年から2006年まで連続で2位につけていたMax Qがやっと優勝した。メンバー全員がこれまでに優勝したことのある経験豊富なカルテットである。

彼らの特徴は何と言っても笑いを忘れないこと。その仕草で聴衆を笑わせにくる。

2005年～2007年の国際大会を記録したドキュメンタリー“American Harmony”にて、金メダルを勝ち取ったカルテットとして取り上げられた。

リードのトニー・デローザは2000年優勝のプラティナム Platinumのバリトンを務め、またMain Streetのリードでもある。

2008年優勝 オーシー・タイムス OC Times

昨年2位のOC Timesが2008年にチャンピオンの座についた。リードのショーン・ディヴァインの情熱的な歌い方には多くのファンがおり、ベースのコリー・ハントは“the Biggest little bass”として愛されている。

彼らのファーストアルバム“Let’s Fly”が、2007年のBest Barbershop AlbumそしてBe

st Barbershop Songの両賞を受賞した。

2011年に来日し、The Lockers が開催したショーにゲストとして招聘される。

2009年優勝 クロスローズ Crossroads

2007年に結成され、2008年には第2位、そのまま2009年に優勝してしまった。リードのマイク・スラムカのなめらかさと力強さを兼ね備えたメロディ運びが素晴らしい。他の3人も桁違いに上手く、完璧なハーモニーを実現している。

テナーのフレッド・ファレルは1989年優勝のセカンド・エディション Second Editionで、リードのマイク・スラムカは親戚同士で結成された2003年優勝のパワー・プレイ Power Playで、バリトンのブランドン・ガイTONはFour Voicesで、ベースのジム・ヘンリーはThe Gas House Gangで、メンバーの4人全員が金メダルを獲得している。メンバーの昔と今を聞き比べてみるのも面白い。

2012年に来日し、名古屋、仙台、東京、伊丹の4都市でショーを開催した。

2010年優勝 ストーム・フロント Storm Front

かなり長くコンテストに挑戦し、徐々に順位を上げて来たカルテット。いわゆるコメディカルテットで、コメディカルテットが優勝するのは1999年優勝のフレッド FRED以来とも言われる。

彼らが演奏した“Lida Rose”について解説しておくのと、本来男声と女声のダブルカルテットで歌う曲なのだが、バトンタッチしても女声のカルテットがいなかったため仕方なしに男声と女声を織り交ぜて歌う、という演出である。お遊びを交えながらも演奏は最高級なのがミソ。

2011年優勝 オールド・スクール Old School

リードのジョー・コネリーは過去3回、カルテットでチャンピオンになっており、その凄さは“Awesome Joe”の異名をとることからも伺える。今回の優勝により、史上最多の4個目のゴールド・メダルをジョーが手にすることとなった。またバリトンのジャック・ピントは4パート分の音程を全て歌え、どのパートにもヘルプで入ることができる。4パートを歌える音域、そんな人もいるのだなあと思ったら、それを仕事にしているVocal Spectrumのチームがいた。皆Awesomeである。

2012年優勝 リングマスターズ Ringmasters

2008年にカレッジ部門で優勝した、スウェーデン出身の若い4人組。アメリカ出身ではないカルテットが優勝するのは史上初めて。また、Vocal Spectrum以来3組目となる、カレッジ部門でも優勝しているカルテットとなった。

ベース以外の、テナー、リード、バリトンはお互いのパートの音も覚えており、3パートを自由に入れ替わることができる。スタイリッシュを具現化したようなカルテットで、気持ちよさそうに歌うので見ていて楽しい。

2013年優勝 マスターピース Masterpiece

準々決勝、準決勝と、一度もトップになることのなかったマスターピースが決勝で覆し、優勝した。国際大会では、このようなどんでん返しがなかなか珍しい。リードのパトリック・ヘドラーが歌うメロディはとても情熱的で、心を動かされる。バリトンのアラン・ゴードンは2004年優勝のガッチャ! Gotcha!でも金メダルを取り、テナーのロブ・メナカーは1996年優勝のNightlifeでも優勝している。

2014年優勝 ミュージカル・アイランド・ボーイズ Musical Island Boys

2006年にカレッジ部門で優勝した、ニュージーランド出身の若い4人組。Ringmasters以来2組目の、アメリカ出身ではない優勝カルテットである。そして、これまたRingmasters以来4組目の、過去にカレッジ部門で優勝したカルテットとなった。

リードのマーセラス・ワッシュバーンの情熱的なメロディが特徴的である。

東京バーバーズの第八回ショウのゲストとして、チャンピオンになる前の2013年に来日している。

どのカルテットも一聴の価値がある。が、同じ人物が何度も優勝したりしているので、業界のトップが特定の人物で回されている感も否めない。

協会のモットーである「世界中を歌で満たそう Keep the Whole World Singing」。バーバーショップが世界中に広がっている様子が国際大会の盛況ぶりからも確認できる。

第3章 日本でのバーバーショップ

この章では、わが国日本でバーバーショップはどのように歌われてきたかを述べていく。日本でのバーバーショップの歴史は、第二次世界大戦後までさかのぼる。

第二次世界大戦後、進駐軍の兵士たちがもたらしたバーバーショップ・ハーモニー、米軍キャンプを訪れてこれを知った多くの学生合唱団もバーバーショップを歌うようになった。しかし、朝鮮戦争が終わり進駐軍の兵士の数も減るにしたがって、バーバーショップの歌い方も米国の情報も入らなくなった。その結果、バーバーショップの名前は残ったが、歌い方が分からないままに、1970年代にはほとんど廃れてしまった。1980年代には、バーバーショップは米国でも廃れただろう、とさえ言われていた。¹²

米軍キャンプを通して、米国人が歌う本物のバーバーショップに接する機会があった世代を第一世代とすると、第二世代・第三世代はバーバーショップの歌い方も分からず面白さも実感できなくなっていただろう。これからの第四世代は歌い方も分かっているし、ネットの普及によりどこでも本場のバーバーショップを聴くことが出来る。環境は第一世代のレベルに戻った、と言えよう。

第1節 日本バーバーショップ・カルテット協会の設立

さて、そんな日本にもバーバーショップの協会が存在する。その名も日本バーバーショップ・カルテット協会 SBSQJ (Society of BarberShop Quartet in Japan)である。

昨年春、各地でバラバラに活動していたいくつものバーバーショップ・カルテットが初めて、一堂に会する機会がありました。意気投合した私達は、その日のうちに日本バーバーショップ・カルテット協会を結成し、その旗揚げイベントとしてこのフェスティバルを企画したのです¹³。

上記の引用文は、協会が設立されてから一年後の2004年に東京で行われた、第一回日本バーバーショップ・カルテット・フェスティバルに寄稿された文である。その後も協会は、2005年に第二回（ゲスト・カルテット：The Gas House Gang）、2008年に第三回（ゲスト・カルテット：Vocal Spectrum）のバーバーショップ・カルテット・フェスティバルを開催している。

協会設立に関わった主な人物の一人に菅野哲男氏という人物がいる。本場・アメリカの協会BHSの機関誌ハーモナイザー Harmonizer に、菅野氏を紹介する文章が掲載されていたので本論で引用してみよう。

彼は辛抱強く、バーバーショップ・ハーモニーを普及させるために活動を続けてきた。日本で合唱をする人達にバーバーショップ・スタイルを教えるため、本の共同執筆

や日本バーバーショップ・カルテット協会の設立などを行った。

2004年5月、日本で最初のバーバーショップ・カルテットのフェスティバルが開催された。その影には、フェスティバルを成功させるため、立案と構成に尽力した菅野哲男さんの姿があった¹⁴。

BHSの設立者 O.C.Cash と菅野氏を重ねて、「日本のO.C.Cash」とも紹介されていた。菅野氏はバーバーショップを日本に持ち込んできた、いわば伝道者である。

その菅野氏と共に協会を設立したもう一人の人物、それは広瀬康夫氏である。菅野氏が伝道してきたバーバーショップを日本中に広めたのは、他ならぬ広瀬氏である。

関西学院グリークラブやコール・セコインデなど、常任指揮の合唱団はもちろんのこと、金沢メンネルコールなど客演指揮を務めている合唱団の演目にもバーバーショップを果敢に組み込み、その楽しさをお客さんと演奏者の双方に伝えている。

バーバーショップを伝えた菅野氏と広めた広瀬氏の両人は、バーバーショップ界のパイオニアとして広く知られている。しかし残念なことに、日本バーバーショップ・カルテット協会は現在活動がなされていない。いつか再び動き出すことを願ってやまない。

第2節 バーバーショップを歌う合唱団

近年、日本でバーバーショップを歌う団体が増えてきた。その団体を紹介していこう。日本で最初に誕生した男声バーバーショップ・コーラスの名を、東京バーバーズという。

1980年代に米国でバーバーショップに触れた日本の合唱人が1992年に結成したのが、日本初のバーバーショップ・コーラス、東京バーバーズである。東京やその近郊で活動し、バーバーショップの楽しさを多くの人々に伝えた。豊かなハーモニーを心掛け、聴衆に向かって歌うことを大切にし、ステージ上では表情や動きをつけ、必ず暗譜で歌う。

また、環太平洋バーバーショップ大会への出場や、2000年と2003年にワールド・ハーモニー・ジャンボリーに招待されて演奏するなど、国内よりはむしろ海外で名前が知られていることも特徴である。なにしろ、私用、社用で欧米から来日するバーバーショッパーは滞在中に東京バーバーズと一緒に歌おう、と必ず連絡をしてくるほど海外には広く知られている¹⁵。

前述した“Keepsake”のテナー、ロジャー・ロスが指揮者グループの一人であるなど、本場のバーバーショップを追究している。

また2014年にも、ニュージーランドで開催された環太平洋バーバーショップ大会という大会に参加するなど、まだまだ精力的な活動を続けている。

他のバーバーショップ・コーラスも挙げていく。

The Lockers…今最も勢いのある男声バーバーショップ・コーラス、The Lockers。

“Lock”とは「ガッツリハマる」という意味の業界俗語で、アンサンブル・リード Ensemble Reed、プライスレス Priceless、セルフイッシュ・パル Selfish Palという別々の3団体がお互いに声を掛け合い結成された。2008年に行われた、全国男声声楽アンサンブルコンテスト「三田ハマらっせ！」にて、初出場にして大賞受賞という鮮烈なデビューを飾る。その後も国際チャンピオンカルテットの“Keepsake”との共演や“OC Times”を招聘するなど精力的な活動を行っている。

2014年2月に東京バーバーズとのジョイントコンサートを東京で開催、好評を博した。2016年には第2回目のジョイントコンサートを大阪にて行うことが計画されている。

。

Ensemble Reed…京都大学の公認サークルで、大学院生が中心となり活動している。Reedとは「葦（あし）」のことで、「音楽愛想」が花言葉。The Lockersに内包された中、今でも活動が続いている唯一の団体である。

The Milestones…東京バーバーズに続いて2番目に結成された男声バーバーショップ・コーラス、マイルストーンズ。東京を拠点に活動し、2005年にデビュー。

SAI Tokyo Chorus…1978年に創設された、女声初のバーバーショップ・コーラス。SAIとは前述したSweet Adelines Internationalのことで、SAIに所属してから35周年目を迎えた。2014年4月に行われた女声の国際大会に参加するなど、その勢いはとどまるところを知らない。

Barbershop Circle…2014年6月から活動がスタートした、新進気鋭の女声バーバーショップ・コーラス。東京に拠点を置き活動している。

また、合唱団同士の合同演奏でバーバーショップが演奏されることもある。特筆すべきは、2003年の東西四大学合唱演奏会（四連）の合同ステージにて100人を超える大合唱でバーバーショップが演奏されたことである。

五十音順で関西学院グリークラブ、慶応義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団、同志社グリークラブ、早稲田大学グリークラブの4大学が参加する演奏会、その合同ステージは本来ならば通常の男声四部合唱が歌われるところだが、前述したバーバーショップのパイオニア、関西学院グリークラブの常任指揮者でもある広瀬康夫氏が合同演奏の指揮者を担当した2003年にバーバーショップが選曲された。少し長くなってしまいが、広瀬氏の手記からある文章を紹介したい。どれほどチャレンジングな選択であったかが分かるはずである。

私が 2003 年の東西四大学合唱演奏会(四連)の合同ステージの指揮を依頼されたときに、バーバーショップを選んだのは当然のことではありましたが、同時にかなりの冒険ではありました。まず関学を除く各校のメンバーの中に「バーバーショップ」に対するある種不安感がかなりあったこと。彼らのリクエストは「英語の曲でお客様がリラックスして楽しめるもの」でしたから、私は迷わずバーバーショップに決めたのですが、いざそうなると、各校の技術陣の中でも賛否両論あったように聞きました。練習過程でも最初は彼らが戸惑っている様子がわかって私もいささか無謀だったと思ったこともありました。といいますのも、このとき選んだ曲はバーバーショップアレンジの中でも非常に難度の高い、しかも振り付けまである **Vocal Majority** の十八番「ジェリコの戦い」でしたから。

そもそも物事のアプローチというのは、着実に基本をやってからというのがセオリーでしょう。しかし私は逆に「これをどうしてもやりたい、やるのだ」という強い動機と信念があれば、それを糧に目標を見定め、徹底的に完成形の真似をしてみるところからスタートするのも 1 つの方法だと思いました。もちろんその過程で自分に足りないものが次々と見つかります。後戻りも必要でしょう。結果あきらめることもあるかもしれませんが。しかしこのチャレンジは長い目で見れば絶対無駄にはならないし、何が自分に必要かを明確にしてくれます。

結局四連の連中は、見事にこれをこなし、本番では、四連史上これほどの喝采はなかったと言われるほどの大成功に終わったのです。私は学生たちの吸収力と対応力をこれほど頼もしく思ったことはありませんでした。本番後に何人ものメンバーから「実は私はバーバーショップに反対だったんですが、認識が間違っていました」との主旨のメールをもらったり、「これを機にカルテットをつくりました」との報告をいくつも聞きました。その後、四連合同を経験して卒業したメンバーが中心となり、出身校の枠を越えて東京と関西でバーバーショップコーラスを立ち上げました。私もアドバイザーとして参画していますが、これほど嬉しいことはありません¹⁶。

結果、この合同ステージは大盛況のうちに終わり、この演奏会を機に、東西の合唱をする若者の間でバーバーショップの名が急激に知られるようになった。有名になっただけではなく、実際に、彼らによって上記の数々の団体が作られた。これからますます日本のバーバーショップは発展していくことだろう。

第四章 バーバーショップを歌おう

この章では、あなたが実際にバーバーショップを歌おうとしたときの流れや注意を共に確認していく。

第一節 パートを決めよう

まずはどの部分を歌うかを決めよう。パートについては第一章にも記述したが、次は技術的な観点から各パートを見ていこう。

譜面の上(高い方)から、テナー、リード、バリトン、ベースと呼びます。曲によってももちろん違いますが、リードとバリトンはほとんど音域が同じで、リードの方が下を歌うことも頻繁にありますので、いわゆる従来のセカンドテナーとバリトンをそのまま当てはめるのは非常に危険です。「バリトン」という概念を変えていただく必要があります。声にピントがあって歌心のあるリード、ハーモニー感覚に優れていて臨機応変にメロディとバランス出来る人がバリトンと考えればいいかもしれません。ベースについては元々ベースの方が歌うのが自然と思いますが、問題はテナーです。テナーにはほとんどメロディはやって来ません。トップテナーの性格とはかなり違うのと、ファルセットを多用しますのでその得意な方(ベース系の方が向いているケースが多いです)を起用するのがよいでしょう。もう一度パートごとに特徴をまとめますと、

テナー…最高音を歌うが、スピントする(劇的な盛り上がりを見せる)ことはまずない(メロディなら別)。ファルセットでピッチが不安定にならないメンバーが必要。パートの性格として従来のトップテナーの人はかえって歌いにくいかも。ベースパートでもファルセットが得意なら積極的に起用して欲しい。

リード…文字通り歌をリードしていく主役なので、歌心があって長いフレーズを歌いきれる伸びのある声が良い。低い音域でメロディを聴かせないと行けないケースも非常に多いのでテナー系の人には少し心配。むしろ音域的には従来のハイバリトンというところ。

バリトン…ハーモニーの構成上、他の3パートの隙間を埋める役なので、歌いにくい音の跳躍や微妙な音進行が常にある。音域は通常はリードと同等もしくは少し上というところだが、ベースとの関係で5度に入って鳴らすことも多いので音色を自在に変えられる能力も必要。音量のバランスも一番難しい。

ベース…ハーモニーの土台として正確な音程と豊かな響きが必要。超低音はあまり出ないが高方はファ、ファ#あたりはざらに出てくる。メロディも時々やってくるので歌心も必要。ハーモニーだけでなくリズムも支えているので実はリズム感を一番要求されるパートでもある¹⁷。

自分に適したパートが見つければ、次に自分以外の3パートを歌う仲間を探す。このときパート・バランスのことも考えなければならない。

パート・バランスは、細かくいうと、和音ごとに代えることになるのだが、一般的にはリードとベースは和音の五度や基音（ルート）に入ることが多いので、テナー:リード:バリトン:ベースのバランスは、1:3:2:4程度が、和音の力を引き出す上で望ましい。

もともと昔は、メロディより高いテナーが、バーバーショップ・スタイルの大きな特徴であると考えられていたので、パート・バランスは、リード>テナー>ベース>バリトンとなっていたそうである。ベースをたっぷり歌って、響きをしっかり楽しむようになったのは、1960年代に入ってからのような¹⁸。

全員が上記の歌い方を習得していれば何ら問題はないわけである。ちなみにパートの並び方も男声合唱と異なる。

日本の合唱ともう一つ違う所に、パートの並び方がある。通常の合唱では、音域の高いパートから順にトップ、セカンド、バリトン、ベースと並ぶが、バーバーショップのカルテットでは、メロディを歌うリードと、和音の基音（ルート）に入ることの多い最低音部のベースが中央に並び、その外側にテナーとバリトンが位置する。

ちなみにバーバーショップ・コーラスの並び方は、カルテットと同じパート順で並ぶ場合や、リードの一方の側にテナーとバリトンが固まる場合（ベースがたっぷり歌うと、メロディがバリトンに聞こえ難いため）、完全にバラバラになる場合（ショットガン）など、その規模により様々である¹⁹。

つまりカルテットならテナー・リード・ベース・バリトンの順に並ぶということである。

第二節 楽譜を手に入れよう

さて、次は楽譜の入手である。数多くあるバーバーショップの楽譜の中から歌いたいものを選ぶのだ。一般的に曲は、その速度からアップチューンとバラードに大別される。身近にバーバーショップを歌う合唱団がなくどんな曲があるのか分からない場合でも、第二章で挙げたチャンピオンカルテットなど、ネット上にたくさん動画があげられているので探すといい。ただし注意が必要である。楽譜の流用・耳コピ譜の使用は違法、著作権侵害にあたる。

ではどこで楽譜を手に入れるのかというと、**Harmony Marketplace**で注文するという方法がある。第二章でも紹介したが、Harmony MarketplaceとはBHS直営のお買い物サイトで

ある。楽譜の他には、服やマグカップなど、音楽とは関係ないグッズまで販売している。ここで楽譜を買う際に面倒なのは、ドルで支払いをすることと、船便を選んだ場合は入手に2週間近くかかってしまうことである。ただ、「データで受け取り」を選んだ場合は楽譜がデータで送られてくるのですぐに手に入る。

その他の方法は、アレンジャーにメールするという方法もある。なかなかの勇気が要ることであるが、編曲者に直接連絡し楽譜を買うのである。大抵どのアレンジャーもどこかのコーラスの指揮者をしているので、そのコーラスのHPにいけばアレンジャーのアドレスにたどり着ける。

お金を払いたくないという人には、無料楽譜という手がある。協会のサイトに無料の楽譜が落ちている。ここなら著作権フリーなのでどんどん演奏しよう。<http://www.barbershop.org/document-center/category/19-free-music-for-printing.html>

第三節 バーバーショップ入門キット

初めて会った人とハモれるように誰もが知っている曲の楽譜が欲しい！ 誰もが知っているレパートリーを覚えたい！ という人にオススメなのが、「バーバーショップ入門キット」である。

バーバーショップ協会に入会すると送られてくるこの入門キットには、計12曲の楽譜が収録されている。半ページ程の短い曲から3ページ程の長い曲まであり、いずれもセブンスを中心としたバーバーショップのエッセンスが詰まっている。これらの曲を一通りマスターすると、バーバーショップの和音展開に慣れ、自然にレベルアップ出来るようにデザインされている。また10年に1回程度、曲目の見直しがあり、時代遅れにならないような努力もされている。

このようなシステムのお陰で、協会員であれば必ずこの12曲を知っている。世界中どこに行っても、メンバーが集まれば歌えるという訳だ。

日本の合唱団にはそれぞれ「愛唱曲集」はあるが、その内容は独自のもので、共通の曲は少ない。日本の合唱界も、「共通のレパートリーを持つ」というシステムを見直したいものである。

第四節 タグ

バーバーショップ入門キットで12曲覚えるのは、面倒くさい！ もっと短く済むものはないの？ そんなあなたには「タグ」がぴったり。タグとは、アレンジャーが最も思いを込めて編曲する、曲の一番最後の部分のことである。タグを上手く歌いこなせたかどうかでその演奏の価値が決まる、だから「値札」という名が付いた、という話もあるほど重要

な部分である。

合唱人の知っているところで言うと「コーダ」が一番近いが、バーバーショッパーのタグへの愛はそんなものではない。何せ、タグだけの曲集がBHSから出版されているほどである。その中から代表的なタグを覚えておくと、初めて会った人ともハモることが出来るという寸法だ。もちろんタグは大量に存在するので、こちらが知らないタグはその場で教えてくれる。大丈夫、タグならではの短さと、掌を反転させて半音を表す独特の仕草によって、すぐに覚えることができる。

タグの良い点はそう、短いことである。4人揃えば、駅のホームで、空港で、アフターグロウ（原意は「残照」。転じて、公演後の打ち上げや練習後の飲み会のことを指す）で、時と場所を選ばずに歌うことが出来る。だがそんなタグの手軽さから、「タグ・カルテット」と言うと「その場限りの寄せ集めカルテット」という意味になる。言葉は使いよう。

第五節 Vowel Matching（母音を揃える）

さて、楽譜も無事に入手したので、既に練習に入っている頃だと思う。次は、よりハモらせるために重要な「母音」の話である。

英語には16種類も母音があり、出身地でも発音が微妙に違う。これらをメンバーで揃えるため、BHSからは「理想的な口の形」という発音チャートが発行されている。これは米国のバーバーショッパーが解析した「Vowel Matching」に基づくものである。Vowel Matchingとは文字通り、「母音を揃える」理論である。

この研究によれば、各母音には特有の倍音パターンがあり、同じ母音であっても個人の癖によってこの倍音パターンに更なる異なりが見られたという。従って、よりハモるためには母音を揃えるのが一番のコツであるというのが結論である。つまりVowel Matchingとは、母音が揃っていないとしっかりハモらないという理論である。が実際には、パートによって唇の形や口の中の空間の作り方が少しずつ違うので、母音の響きの明暗まで揃えるのはそう簡単にはいかない。

ともすればテナー系の高音パートは響きを明るく、ベース系の低音パートは響きを暗くしがちである。特にベースは低音で「ベースらしさ」を出そうと暗い響きを強調する傾向があるが、バーバーショップで「ベースは明るくテナーは暗く」と教えられるのは、母音の響きの明暗まで揃えるためかもしれない。

要は「母音の癖の揃っていないコーラス」は「調律されていないピアノ」と同じだということである。そこまで注意して練習している合唱団は少ないのではないだろうか。

第六節 二重母音・子音の処理

もう一つ心に留めておくべきことは、二重母音の処理である。英語の楽譜では1つの音符に2つの母音が付くことが少なくない。母音を揃えることが豊かなハーモニーの基本なので、例えばPlayの「エ・イ」のような二重母音は、全パートと一緒に「イ」に動くことが重要である。皆が「エ」を歌っている内に誰かが「イ」に入ってしまうと、その瞬間に豊かなハーモニーは痩せてしまうからである。

最後に注意すべきことは、子音の処理である。日本の合唱ではドイツ歌曲の流れを汲んでK,P,Tのような破裂音はしっかり破裂させるが、バーバーショップではハーモニーを奏する母音の流れを分断しないように、破裂音は丸めて歌えと指導される。これは日本語での、語頭以外の「が」を鼻濁音で、と似た感覚だと思う。

但し、こうして子音を完全に丸めてしまうと言葉が聞き取れなくなるので、リエゾン(連結発音)を活用して、前後の単語を上手く使い子音が抜けないように聴かせる工夫が必要となってくる。

第七節 MC

きっと今頃、あなたのカルテットはとてもよくハモるに違いない。最後に、本番の演奏会で忘れてはならない要素、MCについて説明していく。

バーバーショップのショーでエンターテインメント性を発揮するために、MC(司会者)は欠かせない。バーバーショップの演奏会はエンターテインメント性を求めたショーであるので、漫然と歌うだけではなく、綿密なショー・スクリプト(台本)に基づいて、歌あり笑いありの舞台を構成していくことが多い。MCはそのステージの切り盛りを行い、雰囲気盛り上げていくことに、驚くほど重要な役割を担っていると言える。

日本の演奏会では、舞台上に司会者が出て来ることは珍しい。司会者はせいぜい舞台袖のマイクからアナウンスを入れる程度だ。そのため聴衆はパンフレットの演奏曲目を追い掛け、初めて聴く曲があると暗い中で解説に目を凝らして、より理解しようと必死になる。聴衆をほったらかしている証拠だ。舞台作りのコンセプトが違うので一概には比較できないだろうが、日本の合唱界では、演奏会を聴衆との積極的なコミュニケーションの場と考えることは少ないと思われる。

バーバーショップ・コーラスのステージではMCが別に付くことが多いが、カルテットのステージでは4人の中から代わる代わる出てきて、ジョークや小話を織り込んだり曲の紹介をしたりしてMCの役割を交代で果たす。こうしてプログラムの進行と、聴衆とのコミュニケーションとをしながらステージを進めていくのだ。歌が上手いだけではダメで、舞台上で雰囲気をコントロールし、最適なムード作りをする能力まで問われる、という訳だ。

MCの役割は、実はこれだけではない。BHSの協会誌Harmonizerに掲載された「MC心得十ヶ条」を紹介しよう。

- ① 求められている役割を正しく理解し、しっかり果たすこと
- ② 最適な舞台配置（位置、マイク、スポットライトなど）を確認しておくこと
- ③ 演奏者の「売り」が何であるかを理解しておくこと
- ④ 休憩時間はなるべく短くすること
- ⑤ ショーを持たせるのに十分な話題を準備しておくこと
- ⑥ 人真似ではなく自分のスタイルで司会をすること
- ⑦ 聴衆に誠実に向き合い、ラポール（親密な関係）を確立すること
- ⑧ 事故や火災に備え、非常口や出口への経路を確認しておくこと
- ⑨ 舞台での紹介はマンネリ化を避け、いつも新しいアプローチを考えておくこと
- ⑩ アンコールやフィナーレについても準備を怠らないこと

危機管理の項目までリストアップされているのは流石としか言いようがない。

第八節 コレオグラフィー（振り付け）

ここまではカルテットを想定して進めてきたが、コーラスの場合はコレオグラフィー（振り付け）、略してコレオも忘れてはならない。第五章にて詳しく説明するので控えるが、バーバーショップ・コーラスにおけるコレオはとても大事な要素だと考える。そこで、特徴的な三つのコレオを紹介しよう。一つはリップル (ripple)、原義の「さざ波」の通り、タイミングをずらして同じ動きをすることによって波打っているように見せるコレオである。もう一つはセット (set)と言い、内側から外側に体勢を整え直すだけの動きだが、全員で揃えて行くと、それだけでもカッコよく見える。最後がスプリード (spread)というもので、曲の一番最後に多く使われる。こちらも原義「広げる」の通り、体を内側に向けて外手を出すことによって広がりを見せるコレオである。歌舞伎でいう「見得」のようなもので、指揮者（ディレクター）も客席を向くなど最も盛り上がるコレオの一つ。

ちなみに、さらっと指揮者（ディレクター）と表記したが、合唱での指揮者（コンダクター）とはあり方が違う。コンダクターではなくディレクターなので、歌い手を動かそうとするのではなく歌い手をまとめるだけである。

他の、合唱との名称の違いは、合唱ではオンステする場所のことを「オーダー」と言うのに対して、バーバーショップでは「ライザーポジション」と呼ぶ。由来は、知らない。

最後、話が逸れたが、是非この章を活用して、あなたのバーバーショップ活動を充実させていってほしい。

第五章 バーバーショップ・スタイルは何を大切にしているか

最後に、本論文のテーマでもある「バーバーショップ・スタイルは何を大切にしているか」について紐解いていこうと思う。

第一節 感情表現

バーバーショップにあつて男声合唱にないものとは何だろうか。その一つとして挙げられるのが、多彩な感情表現である。

確かに男声合唱もテンポ、ピッチ、声量、イントネーションを巧みにコントロールすることによって感情表現を際立たせてはいる。しかしバーバーショップを聴いていると、これらの要素だけではなく、ハーモニーにも感情が宿っていることに気が付く。ただキレイにハモるだけでは喜びの感情しか伝えられない。わざとキレイにハモらなく作るバーバーショップには、悲しみ、苦しみを表現する力がある。深い悲しみや鋭い痛みを伴った苦しみなど、感情は実に数多く存在する。セブンスがバーバーショップに多用されるのは、悲しみ、苦しみを表現するため、そしてそれにより喜びをさらに引き立たせるためではないだろうか。

また、バーバーショップの編曲ではスワイプ、エコー（特定のフレーズを繰り返し歌うこと）、分散和音（和音を構成する全ての音を同時に鳴らすのではなくタイミングをずらして鳴らすこと）などの、和音を利用した編曲要素が多く用いられている。このような一つの編曲要素、演奏表現の中で言葉のニュアンスが引き出され、感情が大きく展開するのだ。バーバーショップとは、感情表現にこだわった芸術であることがつくづく感じられる。

さらに感情表現が豊かな理由として挙げられるのが、曲の解釈が自由なことである。曲の解釈の手掛かりとなる速度標語や強弱記号が楽譜に記載されていないのだ。前述の、感情表現で重要なテンポや声量といった要素が、演奏者の自由に任されており、古典のようながんじがらめの解釈は見られない。よって演奏者の表現したい通りに歌うことができるのだ。

しかし、このように自由に歌えるということは逆に、指示だらけの通常の楽譜に慣れた人には取っ付きにくさを感じるだろう。音楽を知り、バーバーショップ・ハーモニーの真髄に触れ、編曲者の思いを汲み取り、意図せざる果実をも摘み取らなければ、素晴らしい演奏は難しい。これでは、なかなかバーバーショップ・ハーモニーの普及拡大は困難である。そのせいか、最近では曲の背景やテンポなど、解釈の手掛かりつきの楽譜も出てきた。

第二章でも述べたが、バーバーショップ・ハーモニーにはそもそも楽譜さえなかったの

だ。協会が楽譜を出版する際には、楽譜などに頼る軟弱な歌い方はバーバーショップの本質を損なう、と言われた。楽譜さえ拒んだのがバーバーショップの古き善き伝統とあれば、解釈を縛り付ける音楽記号は無用の長物、とされるのも無理はない。

つまり、バーバーショップの演奏は、歌詞を十分に生かした曲想で、緩急自在、強弱自由、表情多彩で歌う。楽譜や音楽記号にとらわれることなく、心の歌を歌うところにバーバーショップの失ってはならない精神があるのだ。

第二節 エンターテインメント性

バーバーショップにあって男声合唱にないもの、もう一つ考えられるのが、エンターテインメント性である。

前述したが、バーバーショップにはコレオグラフィー（振り付け）というものがある。規模の大きなバーバーショップ・コーラスには専属のコレオグラファー（振り付け師）が付き、お客さんを引き込ませよう、飽きさせぬようと試行錯誤しているのだ。

歌を「聖」と「俗」に分けるとすれば、バーバーショップは基本的にエンターテインメントであり、「俗」である。「聖」が神との交流であるならば、「俗」は聴衆との交流と言えよう。それ故、バーバーショップの演奏会は「ショー」と呼ばれ、聴衆へのサービス精神が重要な要素となる。

ミサを歌う時のように楽譜を持って直立不動、神への敬謙な祈りを捧げるタイプの、日本の合唱界の主流を成す「芸術」としての合唱」と違い、バーバーショップでは「芸能」としての合唱」が基本だから、歌い手はエンターテイナーであり、表情豊かに歌うことが大前提。譜面に顔を埋めていてはエンターテイナー気取りもあったものではないから、ショーなど人前で歌うには暗譜が絶対必要条件である²⁰。

本場のバーバーショッパーの歌う顔は実に表情豊かで、ステージ上でも転げ回らんばかりのアツいコレオを行っている。

「アメリカ人はジェスチャーが豊かだから日本人よりもエンターテインメントに慣れている」と思ってしまうが、そういうものでもないらしい。米国人でもちゃんとした家庭では、「男はいちいち感情を顔に出すんじゃない」と躰られるので、喜怒哀楽を舞台の上で

自然に表現するには、自我の殻を脱げるようにならないと難しい。その一皮がむけるかどうかで、“良い演奏”と“素晴らしい演奏”の違いが生まれる。

コンテストの審査で「表現力」という項目があるのだが、「歌う曲の中身を理解し、それを表現するものでなければならない」と定められているので、派手なだけのコレオに「表現力」の高得点は与えられない。悲しいフレーズで寄せる眉根一つ、そして心からの「愛してる」が大事なのだ。口先だけでなく、心の底から歌っていることが伝わらなければ、単なる発声練習であり、エンターテインメントとしての価値は低い。

前述したMCの存在も、エンターテインメントの追究に一役買っている。聴衆を楽しませ、共に楽しむのがバーバーショップの本来のあり方だ。観ても聴いても楽しめる、一流のエンターテインメントをバーバーショップ・スタイルは実現している。

結論

本論文では「バーバーショップ・スタイルは何を大切にしているか」というテーマについて、次のようなことを検証してきた。

第一章では、バーバーショップ・スタイルの「定義」と他の合唱スタイルとは違う「特徴」を確認し、さらに各パートの説明も行った。

第二章では、アメリカで生まれ黒人に育てられたバーバーショップ・ハーモニーの発展過程を辿った。第一節では、一度は廃れてしまったバーバーショップを再興に導いたバーバーショップ・ハーモニー協会をはじめ、数々の協会を紹介し、バーバーショップの今日の盛り上がりの原点を探した。第二節では、ファン垂涎の国際大会とそのプログラムを紹介することで、次世代を担う若手バーバーショップパーの育成にも力を入れていることを感じることができた。第三節では、国際大会の歴代優勝カルテットの紹介を行った。近年ではアメリカ人カルテット以外の優勝も見られ、確実にバーバーショップが世界中に広がっていることを感じた。

第三章では、戦後日本にも伝わってきたバーバーショップがどのような道りを辿ってきたかを追った。第一節では日本で唯一のバーバーショップの協会、日本バーバーショップ・カルテット協会を紹介した。第二節では日本でバーバーショップを歌っている合唱団を紹介することによって、日本のバーバーショップもこれからますます発展していくであろう、と感じることができた。

第四章では、「バーバーショップを歌おう」と題して、バーバーショップを歌いたくなった人のためのハウツーを掲載した。第一節で、第一章で確認したはずの各パートの説明を、今度は技術的な観点から言及するなどし、第二節で、日本で全く流通していない楽譜の買い方を、第五節、第六節で、よりハモるために注意すべきこととして **Vowel Matching** と二重母音・子音の処理を執筆した。さらにMCについて言及し、代表的なコレオグラファーの紹介も行った。

第五章一節では、感情表現について論じた。深い悲しみや鋭い痛みを伴った悲しみなど、感情は実に数多く存在する。その一つ一つを、テンポ、声量、そしてハーモニーで表現するのだ。ただキレイにハモるだけでは喜びしか表せない。わざとハモらなく作るバーバーショップには、悲しみ、苦しみを表現する力がある。そして、より喜びが引き立つのだ。

第五章二節では、エンターテインメント性について論じた。バーバーショップとは、聴衆を楽しませるのが本来のあり方だ。曲に合わせてステージ上で表情豊かに歌う。時にはマスダンスのような振り付けでさえも、聴衆により楽しんでもらおうとする気持ちの表れ

である。観ても聴いても楽しめる、一流のエンターテインメントをバーバーショップ・スタイルは実現している。

以上のことから、バーバーショップ・スタイルの根底に流れ、大切にされてきた精神とは、多彩な感情表現、エンターテインメント性の二つであると結論づける。

あとがき

僕がバーバーショップ・スタイルのことを知ったのは高校1年生の頃。グリークラブ、つまり合唱部に所属していたのでバーバーショップが伝わってくることに不思議はない。しかし先輩が教えてくれるのはそんなジャンルがあるということだけで、バーバーショップそのものについて教えてくれる人はいなかった。何も分からなかった。

他の生徒はちゃんとしたテーマで、例えば、教育とか、食の問題とか、きっちり作っているのに、なんだよバーバーショップって。そう一瞥をくれた人も多いただろう。だが馬鹿にすることなかれ。バーバーショップはこれから知名度を上げていくのだ。

そもそも、日本で「合唱」というと根暗なイメージがあるのは何故なのか。ウチの学校でも同じである。歌っているクラスメートが根暗そうだから？歌っている顔が顔芸だから？どうしようもないので置いておくが、バーバーショップには合唱の根暗なイメージを吹き飛ばしてくれるパワーがあると信じている。何せ、聴衆と一緒に「楽しむ」のだから。

そう、バーバーショップを有名にしたい。僕の思いである。そうすれば、合唱は楽しいと思ってもらえるかもしれない。少しずつ合唱人口が増えるかもしれない。いつか再び男声合唱が栄えるかもしれない。

そのためには、J-popのバーバーショップ編曲を増やすことが先決だと思う。まずは興味を持ってもらわないと。メジャーな曲で、「何このアレンジカッコいい！」と思わせることが大事だと思う。

と同時に、J-pop独自のバーバーショップのあり方を模索できないだろうかとも考えている。邦楽と洋楽の違いを前面に出し、新しいバーバーショップを作れないか。正直だいぶ難しいので、これからボチボチ考えていく。今は普通のバーバーショップ編曲を、下手なりに見よう見まねでやってみようと思う。

かく言う僕もまだバーバーショップの本質を理解していないように思う。高校3年生の今、本場のバーバーショップさえ味わえていないのだから。より勉強を重ね、いつか日本でバーバーショップが市民権を得るために、できることからやっていきたいと思う。その第一歩として僕は、バーバーショップを知らない人のために、網羅的にこの論文を書いたのだが、興味を持ってもらえただろうか。歌ってみたくなっただろうか。バーバーショップって楽しそう！と思ってもらえたら本望、何にも代え難い喜びである。

もし興味を持ってくれた人がいたなら、これだけは言いたい。歴代チャンピオンはもちろんのこと、チャンピオン以外もカッコいいので動画を探してみしてほしい。論文作成の為と称して授業中に堂々と動画を漁れたのは楽しかった。

本論文にも登場された、菅野哲男さんと広瀬康夫さんのお二方には深い感謝を申し上げます。度重なるメールのやり取りで有用な情報をたくさん頂きました。本当にありがとうございました。そして関西学院高等部図書館司書の石津さんにもお礼申し上げます。資料が少ない中、少しでも関連するものをかき集めて下さいました。ありがとうございました。

さて、もうあとがきも最後である。思えば最初の挫折は、日本で出版されているバーバーショップの本が1冊しかないことだった。その分、その『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』には大変助けられた。愛着すら湧いてきている。せっかくなので最後も『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からの引用で締めくりたい。

さて、合唱をエンターテインメントと考えることは、日本の多くの合唱人にとっては抵抗があるかも知れない。日本では多分、合唱は高尚な「芸術活動」であり、練習という修行を通して芸術の神と触れ合うための活動になっているように見える。その結果として、難行苦行の練習に耐えて難解な曲に挑戦する合唱団と、未消化な状態の演奏を「教養」として聴く聴衆、という不幸な図式の演奏会が時にできあがってはいないだろうか。

合唱人がただ自分達で高い目標に向かって歌っているだけでは、聴衆の心とハーモニーでつながることはどうも難しそうだ。合唱が市民権を取り戻すためには、バーバーショップの志向する合唱の方向が一つのヒントにはなるまいか²¹。

僕は、日本の合唱の「高尚な芸術活動」の要素にあまり馴染めない。目の前のお客さんを楽しませる、という合唱の原点をバーバーショップは忘れない。（終）

（追記）少しでも多くの人に触れてもらうため、本論文をインターネットに公開することとしました。ここまで読んで頂き、ありがとうございました。（2015/3/10 記）

-
- ¹¹ バーバーショップ・ハーモニー協会「An Examination of the Barbershop Style」
<http://barbershop.org/news-a-events-main/204-an-examination-of-the-barbershop-style.html>
2014年11月20日確認
- ² 日本バーバーショップ・カルテット協会『Barbershop Festival with “Vocal Spectrum”！
バーバーショップ・フェスティバル 世界最高のカルテット Vocal Spectrumと共に!』
日本バーバーショップ・カルテット協会、2008年6月14日、P. 8
- ³ 広瀬康夫氏の手記、2013年10月14日確認
- ⁴ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 16
- ⁵ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 59~60
- ⁶ Jim Henry『Harmonizer』Barbershop Harmony Society, July/Aug 2001, P. 13~17
- ⁷ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 36,64)
- ⁸ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 36
- ⁹ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 14
- ¹⁰ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 64
- ¹¹ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P. 68
- ¹² 日本バーバーショップ・カルテット協会『第一回 日本バーバーショップ・カルテット
・フェスティバル ～バーバーショップカルテットの祭典～』日本バーバーショップ・
カルテット協会、2004年5月3日、P. 10~11
- ¹³ 日本バーバーショップ・カルテット協会『第一回 日本バーバーショップ・カルテット
・フェスティバル ～バーバーショップカルテットの祭典～』日本バーバーショッ
プ・カルテット協会、2004年5月3日、P. 5
- ¹⁴ Barbershop Harmony Society『Harmonizer』Barbershop Harmony Society,
July/Aug 2004, P.8
- ¹⁵ 日本バーバーショップ・カルテット協会『第一回日本バーバーショップ・カルテット
・フェスティバル ～バーバーショップカルテットの祭典～』日本バーバーショッ
プ・カルテット協会、2004年5月3日、P.10~11
- ¹⁶ 広瀬康夫氏の手記、2013年10月14日確認
- ¹⁷ 広瀬康夫氏の手記、2013年10月14日確認
- ¹⁸ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P.16~17
- ¹⁹ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P.17
- ²⁰ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、

2001年12月20日、P.12

²¹ 菅野哲男・松村一夫共著『バーバーショップ・ハーモニーへの招待』からくり工房、
2001年12月20日、P.4